講演

人類と文明

松浦晃一郎

講師紹介

服部英二　松浦晃一郎前ユネスコ事務局長のことについてご紹介申し上げます。松浦事務局長とは、私は非常に長くお付き合いさせていただきました。私自身ユネスコの本部の職員でありましたし、いろいろなことを二十一年間にわたってやってきました。退官してから、マイヨール事務局長に顧問として残ってくれということを言われましてそうしましたが、松浦さんが日本人として、またアジア人として初めての事務局長になられた、その時にまた特別参与ということを依頼されまして、そういうことで、ユネスコは私の中に生きているという感じが致します。

特にここで講演していただく意味は大きいと思うんです。注意すべきは、ユネスコの前身です。ユネスコは一九四五年、終戦と同時にロンドンで憲章が採択されて、四六年にパリでスタートした国際機関です。国連の教育科学文化機関ですね。これはご存じだと思うんですが。その前身があったかと言うと、あるんです。第二次世界大戦前、ジュネーブに本部を置いておりましたLeague of Nations、つまり国際連盟の中に「知的協力委員会」というものがありまして、その事務局の責任者が新渡戸稲造博士なのです。この委員会にいろいろな人が集まってきました。中心になったのは、哲学者ベルグソンなのです。しかしマリ・キューリーも来ましたし、アインシュタインも来ています、ホイジンガも来ている、タゴールも来ている。そういう知的協力委員会だったのです。それがロンドンでユネスコを作ろうと考えた人びとの、最初のヒントになっているんですね。ですからこの知的協力委員会がユネスコの前身だと言ってもいいのです。

そこで活躍した新渡戸さんは、この学園を創った廣池千九郎の『道徳科学の論文』に長文の序を寄せております。ありきたり

の形式的な序文ではなしに、心を込めた序文を書いておられます。世界の平和、人類の幸福のためには東方の光がなければならない、ということをはっきり書いていますね。そして廣池千九郎はその東方の一つの星だと書いているわけです。もし知的協力委員会がユネスコの前身だとすると、そのユネスコという機関の長になられた松浦晃一郎さんをここにお迎えできるということには深いご縁があると感じています。

ここで松浦先生のご紹介するに当たって、お手元に配られているプロフィールの中で、一言だけご説明しておきます。「東大法学部中退」と書かれていますが、「中退」とはなぜだと考える人もいるかもしれません。卒業してないのかと。卒業してないんです。これは今の学生には分からないことですが、昔は一番よくできる学生は大学三年の時に外交官試験を受けるのです。そして四年の時に外務省に入ってしまうのです。ということで、「中退」の方が「卒業」より優秀な学生だったということですね。

それから私自身が松浦さんのお働きを見ていて、感じたことをこれから五つ申し上げます。一番目は、松浦さんは事務局長、トップになられて、ユネスコの人事改革、ユネスコ事務局の人事の改革を断行されました。それまでは頭でっかちで、日本の人口ピラミッドのような、そういう構成になっていたのです。これは良くないですね。上の方の局長級の人が多くて、下の方が少ない。それを二年間かけて、正ピラミッド。ギザにみるあのピラミッドのような形に修正されたのです。その努力。それだけでも大変なことだと思います。それで財政が健全化しました。財政が健全化したので、それまで脱退していたアメリカがユネスコへ復帰する。そのことが二〇〇二年のブッシュ大統領の国連演説で言明され、二〇〇三年が正式の復帰になるわけです。これが第二の功績です。

第三に、皆さんがユネスコと言うとまず頭に思い浮かべるのは「世界遺産」だと思うのですが、いかがでしょう。テレビや新聞でいろいろやっていますから～。世界遺産には、文化遺産と自然遺産がありますが、その文化遺産の分布は非常に西欧に傾いている。ほとんど大半がヨーロッパに集中しているわけです。これはどういうことかと言いますと、実は世界遺産条約を一九七二年に作った人の中心がヨーロッパの人たちだったので、その価値観に基準を合わせると、どうしても石の文化を中心とする発想になるのですね。石の文化で選択して行きますと、文化遺産はどうしてもヨーロッパに偏るということは私が在職中も感じていたことなのです。

このひずみに松浦事務局長は一つの抜本的な改革をもたらしました。それは「無形文化財」です。無形文化財というのは、日本ですと、例えば歌舞伎、文楽、能といったものです。つまり建物ではないのですね。伝統的な舞踊であったり歌であったり祭祀であったり、こういうものを無形文化財と言うのですが、松浦さんはその指導力により二〇〇三年、「無形文化財保護条約」というものを成立させています。これは無形文化遺産を世界遺産化した、ということです。いわゆる世界遺産には現在、文化遺産、自然遺産、その二つを合わせた複合遺産があります。そしてもう一つ無形文化

財。これらが対等に並ぶこととなりました。しかもその無形文化財に関する限り、欧米よりもはるかにアジア、アフリカの国の方が多いのです。この条約の採択により、世界遺産という、人類が共有すべき財産が世界にあまねく均等に行きわたる、ということが起こったといえます。

松浦事務局長の第四の功績といえるのは「文明間の対話」の促進ですね。実は一九八五年に私が発案した、「シルクロード：対話の道総合調査」というプロジェクトのキーワードが「文明間の対話」だったのですが、それが二〇〇一年に国連の国際年になりまして、国際的に認知された表現になったわけです。松浦さんが事務局長になった時に、ユネスコの本来の活動の一つであるということで、この文明間対話を異文化間の対話として非常に促進されました。自らもいろいろなところでシンポジウムに参画されている。その記録を私たくさん頂いています。これは非常に素晴らしいことです。

それから最後に、民間ユネスコ運動です。ユネスコは国連機関ですから政府間機関でありますけれども、もう一つそれをサポートする民間ユネスコ組織があるのです。ユネスコクラブあるいはユネスコ協会と言われるもので、今日ここに会員の方がおいでになっていると思いますけれども、柏にも、柏ユネスコ協会があります。そしてこの世界組織があるのです。その世界組織が非常に危ない状況になった時に、松浦事務局長が民間ユネスコ運動の重要性を強調されて立て直しを図られた。私は再生委員会議長としてそのお手伝いをさせて頂いたわけですけれども、民間ユネスコ組織の世界連盟が見事に蘇ったということがあります。

他にもたくさんあると思いますけれども、任期中に私自身の頭に残っていることとしてはそういうことがありました。それから最後の方で、恐らくお話が出ると思いますけれども、二〇〇五年、松浦事務局長の協力の下に、我々がパリで行ったシンポジウムがあります。これは「文化の多様性と通底の価値」というテーマで行いました。その報告書としては、英・仏語版の他に麗澤大学出版会で出版した日本語版があります。世界のトップの知能が集まった素晴らしいシンポジウムを開かせていただきました。それも松浦事務局長の後ろ盾のお蔭です。それから続いて、二〇〇七年に国連大学で第二弾の通底の価値シンポジウムを行いました。その時もパリからご声援をいただいております。長くなりますといけませんので、ここで松浦事務局長にマイクを渡したいと思います。お願いします。

講　演

松浦晃一郎　皆さんこんにちは。私の十年のユネスコの業績を数分で非常に要領良くまとめていただいて、ありがとうございました。

私のこの十年の業績に関していろいろお話ししたいこともございますけれども、後で、もしご質問があれば触れさせていただきます。今日は「人類と文明」という大きなテーマを頂いていますので、このテーマを中心にまずお話します。

先ほど来、最初に廣池理事長のお話をいただきましたけれども、モラロジー研究所

にはいろいろご縁があります。パリのユネスコ本部には廣池理事長にもお出いただきました。服部英二先生は何十回と、この十年にお出いただきました。今までモラロジー研究所にお邪魔する機会がありませんでしたが、今日初めてお邪魔することができて、非常にうれしく思います。講演に先立ちまして、廣池理事長に、モラロジー研究所や曾祖父に当たられる廣池千九郎先生の業績、廣池千九郎先生が推進された道徳科学、モラロジーについて教えていただいて、感銘を受けました。

廣池千九郎先生が道徳科学専攻塾を開塾されたのが昭和十年ということですが、私は昭和十二年生まれです。私が生まれたころにモラロジーを推進されたということで、非常に私は感激をしております。

今回、「人類と文明」というテーマを頂いたのは、いろんな意味でタイムリーだったと思います。何と言っても、東日本大震災からまだ一月余りしか経っていませんので、この大震災の意義をどう分析するかという大きな課題を私たち日本人は抱えています。さらに言えば、先ほど近藤長官からお話がございましたけれども、最近のこの数百年の間でこの大震災をどう位置づけるかという課題があります。今日は、もう少し人類の歴史をさかのぼりまして考えてみたいと思います。

人類が他の動物より優位に立った三つの理由

地球は何年前に誕生したかというのは恐らく皆さんご存じだろうと思いますが、四十五億年前ですね。誕生についても、最初ガス状の状態から固まってきますから、どこから数えるかということによって一億年ぐらいの差が出るようです。固まってから、今のような形態になったのが四十五億年前です。それから生命が誕生したのはそれから十億年経った三十五億年前ですね。三十五億年前にまさに海中で単細胞の生命が誕生しました。それからの経過ははしょりますけれども、私たちの先祖に当たる哺乳類が誕生したのは二億二千年前ですね。ところが哺乳類が実際に地球上で勢力を持ちち出したのは、それまで勢力を持っていた爬虫類の代表の恐竜が絶滅してからになります。今、いろんな化石が発掘されています。日本でも方々で恐竜の化石が発掘されていますが、この恐竜が六千五百五十万年前に絶滅してから初めて哺乳類の時代になります。ですから二億二千年前に哺乳類が誕生しましたが、恐竜が地球を支配していた時には、哺乳類は本当に弱い存在で、恐竜に食べられるので、恐竜から逃げ回っていたんですね。

恐竜が絶滅したのはなぜかという問題については、当初はいろいろな理由が挙げられましたが、最近、定説化してまいりましたのは直径十キロと言われる、非常に巨大な隕石がメキシコのユカタン半島に落ちたということです。現在は半島ですが、当時はまだ海の下でしたが、そのユカタン半島に当たる所に落っこちたとのことです。直径十キロですから、想像を超えていますが、その結果、海底に直径百八十キロの巨大なクレーター（穴）が開いたと言われています。この前の地震と津波と比較しても、比較にならないような大きな規模の地震がおきたと云われています。そして何百メーターもの大きな津波が起こったと言われています。それからいろいろ地球上にチ

リが飛ぶ。さらには、二酸化炭素が太陽をさえぎる。いろんなものが重なって、図体の大きい恐竜が絶滅したわけです。そして初めて、六千五百五十万年前に哺乳類の時代が始まるわけです。

それから、だんだんいろんな哺乳類が出現してきます。人間というのが誕生したのは、五百万年前と最初は言われましたけれども、それから七百万年前という説が出ました。さらに八百万年前という説が出ましたが、現段階ではこれが正しいと言えるでしょう。

アフリカのちょうど真ん中にあるチャドという国があります。そこにチャド湖というのがあります。かつては大きかったんですけれども、今はもう小さな湖になっていますが、そのチャド湖の周辺でトゥーマイ猿人の頭蓋骨が発見されて、これはフランスに持ち帰られました。その後、まだ正確な研究成果が発表されていませんけれども、トゥーマイ猿人は大体七百万年前と言われています。しかし、もっとその前にも人類の祖先はいたと私は思っています。いずれにせよ、この人類が誕生しても哺乳類が爬虫類に対して押さえつけられたように、人類は、もっと強いライオンとか、ヒョウとか、それから象とか、そういう強い哺乳類に押さえつけられる存在でした。まさに我々の祖先は地上に二本足で立ちましたけれども、そういう他の哺乳類の脅威からいかにして逃れて生活して行くかということに苦労したわけです。ただ、だんだん頭脳が発達してきました。いろんな学者がいろいろなことを言っていますけれども、人類が他の動物に対して決定的に強くなったというのには三つの理由があると私は思います。

第一の理由は道具です。石器を発明した。第二の理由は火を発見したことです。第三の理由はコミュニケーションの手段を獲得したことです。これは非常に重要です。動物もいろんなシグナルを使いますが、やっぱり人類のコミュニケーション手段としての言語は重要ですね。奇声を上げるだけじゃなくて、かつまた単語だけじゃなくて、文章としての言語というものを作って、しっかりしたコミュニケーションができるようになったことです。人類が強くなった理由として、この三つが非常に重要だと思います。これで、哺乳類さらには他の動物全体に対して非常に強い立場に立つことができました。

紀元前一万五千年、今から一万七千年前にスペインのアルタミラ洞窟に動物の壁画が描かれました。同じころに他にも動物の壁画がフランスの洞窟やポルトガルの渓谷にも描かれました。最古の壁画は紀元前三万年前のフランスにあるショーヴェ洞窟にあります。私も行きましたが、中に入っていません。だいぶ高い所にあって、一般の人は入れないのです。

氷河時代が紀元前一万二千年ぐらいに終わりますけれども、だんだん人類は他の動物に対しては非常に支配的な地位を築いていくようになりました。しかし自然というものにどう対応するかということに対しては、いろんな試行錯誤がありました。人類はいろいろ他の動物に対して支配的立場になり、自然に対しても、自然をコントロールし支配して行こうというふうに人類が動いていくわけですね。そして、石器がだんだんと発達し、更には青銅器になり、鉄器

になって行き、物質文明の最先端を行く科学技術が、どんどん伸びて行くわけです。やはりこの石器、あるいはそれに続く一連の金属の開発、それから火をエネルギーとして活用すること、それから言語によるコミュニケーションの力の進展、この三つで人類は他の動物を支配する。他の動物を支配したように自然を支配していった。あるいは自然を支配できると考える人たちが出てくる。そこは非常に注意しなければいけないとかねてから思っているわけです。

ユネスコの二つの役割――知的な対話と具体的な実践

ちょっと脱線しますが、私はユネスコの事務局長になりましたのが一九九九年の十一月でした。それから十年間、二〇〇九年の十一月まで事務局長をやりました。本部はパリにありますから、パリを中心にしながら世界のいろんな所へ参りました。

ユネスコというのは、先ほど服部先生からもお話がございましたように、一番有名なのは文化であり、世界遺産ですけれども、実はそれ以外に教育、自然科学、社会科学、それからコミュニケーションという五つの分野を担当しています。ユネスコはハードパワーを持っていないけれども、ソフトパワーを持っています。

これをもうちょっと一般的に言えば、ユネスコの役割は二つあります。先ほど服部先生からもご紹介があった、国際連盟時代の知的協力委員会がそうですけれども、知的な議論をすること、世界の知的な指導者を集めて知的な議論をすることです。議論をする場を提供し、議論のリーダーシップを取って行く、これがその一つです。それからもう一つは、その議論の結論に基づいて具体的なアクションを取っていくということであります。

私が事務局長になった時に、ユネスコのマネージメントの抜本的な改革を行いました。もう一つ、私はプログラムの面では、ユネスコは現実の問題を踏まえて知的な会話や対話をもっとしっかりやっていかなきゃならないと主張しました。それからもう一つ、それ以上に主張したことは、その結論を実施していくということです。アクションを取らなければいけないんです。英語で言うと、action orientedな組織にならなければいけない。そのためにはアクションはパリだけでやっていては駄目なんです。知的な対話、知的な会話ということであれば、パリにみんな集めればいいわけです。しかし具体的なアクションというのはパリだけではできません。

ユネスコのメンバー国は、私が事務局長になった時は一八八カ国でした。しかし、ユネスコを脱退していたのが、アメリカ、イギリス、それからシンガポールの三カ国でした。イギリスはちょうど保守党から労働党に変わる段階でした。事務局長になる直前ですけれども、労働党は国連重視の一環でユネスコに復帰するということを選挙のスローガンに掲げていまして、その結果、イギリスはちょうどユネスコに入ったばかりでした。

しかし私としては、イギリスをしっかりユネスコのメカニズムの中に取り入れて行くという大きな役割がございましたけれども、それ以上に重要なことは、アメリカを復帰させることでした。これを幸いにしても実現させることができました。それから

シンガポールはもっと手こずったんですけれども、これも復帰させました。それから新規の加盟国もございましたから、一八八カ国から一九三カ国になりました。

ユネスコの総会というのは二年に一回あります。一九三カ国から大臣クラスがパリに来てくださります。それから一九三カ国から五八カ国が選ばれて執行委員会というのが構成されていて、これは一国に例えれば立法機関です。事務局は行政機関です。その行政機関のトップを私は務めたわけですけれども、こういった立法や行政の仕事は、みんなパリでできるんですね。

ところが今、私が申し上げたような具体的なアクションを取るというのは、結局、メンバー国でとっていかなければいけないのです。メンバー国の一九三カ国でアクションを取っていくわけです。ユネスコのこの世界的な事務所のネットワークをしっかりしたものにしなければいけません。皆さんは、国連の他の機関で、例えばユニセフはご存じだと思います。ユニセフはまさにこの後者のアクション中心の機関です。これも立派な機関ですね。子どもを対象にして、保健・衛生それから食糧、教育というものを行っています。ユニセフは職員が六千名おります。本部は千名弱です。在外の事務所に五千人です。在外事務所を中心にやっているわけですね。その代わり、非常に正直に申し上げて本部機能は、もう単に事務調整だけで、先ほど私が申し上げたユネスコの大きな役割の二つのうちの最初の知的な会話をする、知的な議論をするということは、残念ながらユニセフの場合はできないし、やっていないのです。

ところが、後者の action oriented な、行動するというのには、ユニセフは断然強い。ユネスコはその逆で、この知的な対話はそれなりにやってきているけれども、現地でのアクションは非常に弱い。ですから一九九〇年代の前半まで、これは私が就任する前ですけれども、本部の職員と在外事務所の職員の比率が、四対一、さらにさかのぼれば五対一でした。それを私の前任者もそれなりに努力して、三対一まで、つまり本部が三、在外事務所が一にまでもっていきました。しかし、私はこれではまだ不十分だと考え、比率を私は二対一まで持って行きました。つまり本部が二、在外が一ということです。ユニセフは一対五ですからね。まだまだです。私はユネスコというのは本部機能というのがしっかりしていなければいけないと考えています。今、申し上げたような知的な議論をしていくという展開を思うと、やっぱり本部機能がしっかりしていないとできません。ですから、そういう意味では二対一、あるいはもうちょっと在外事務所を強化していいと思って、ユネスコを去りましたけれども、まあまあなところにきたかなと思いました。ですから繰り返しになりますけれども、この在外の事務所で action oriented にしなければいけないということ。これが私の事務局長時代の大きなテーマでした。

今日のテーマに戻らしていただきますと、最初の知的な対話をする、知的な会話をするという点では、いろいろな会議を本部で開きました。いろんなノーベル賞をもらわれた方を含めまして、世界のいろんな方を集めていろんなテーマで会議を開きました。先ほど服部先生からお話のあった、「文化の多様性と通底の価値」というテー

マの会議も、私にとっては非常に思い出になる会議です。繰り返しますけれども、文化と言うと、とかくユネスコは世界遺産に結びつけられます。世界遺産は重要です。しかし世界遺産の中で文化遺産は約八割で、自然遺産はその二割です。その八割の文化遺産は有形の文化遺産で、具体的に言えば、建物、モニュメント、遺跡というこの三つのカテゴリーしかないんです。それ以外入ってないんです。人類の文化遺産といった時は、人から人に伝えられている伝統的な儀式、伝統的な踊り、伝統的なお祭りといったものがありますが、こういうものをカバーしてないんですね。これはユネスコが文化全体を対象にしているという点から言えば、文化の多様性の大きな柱の一つが欠けているということになります。私は無形文化遺産条約を推進しましたが、ヨーロッパ諸国は当初いろいろ反対しました。幸いにしてアフリカ、それからアジア太平洋の国は賛成して成功しました。そういう全般の文化の多様性というものをとらえて、そしてそういう全体をとらえる通底の価値、英語で言うとtransversal valueというものを日本人だけじゃなくていろんな世界の専門家を集めて議論していただいきました。これは先ほど、服部先生からご披露ございました『文化の多様性と通底の価値―聖俗の拮抗をめぐる東西対話』（服部英二監修、麗澤大学出版会、平成十九年）として、その成果が刊行されています。ぜひお読みいただきたいと思います。このシンポジウムは二〇〇五年にありました。

地球の将来と人類の在り方――持続的成長と自然との共生

私自身がそういう文化の範囲を広げて行くと同時に、非常に深く議論しなければいけないと思ったのは、一言で言えば地球の将来です。これがまさに今日の本題です。つまり現在の人類の在り方には問題があると思います。人類の歴史、特にこの氷河期が終わってからの一万年余りの歴史を考えた時に、特にこの二十世紀の後半から二十一世紀にかけての人類の生活様式、あるいは暮らし方というのは持続可能な形ではありません。それから自然との間で、地球との関係において、地球の資源をどんどん消費をして、さらに言えば破壊しています。これは持続可能ではありません。

その一番大きな問題は、人口問題です。人口問題は実はタブーになっております。国連機関の長が三十五人集まりまして、国連事務総長の下で年二回、二日間かけて議論する場があります。これは英語で言うと、Chief Executive Boardといい、いわば国連システムのＣＥＯの会ですが、「国連の諸機関の長の会」と意訳できると思います。私はそのメンバーになってから、やはり地球の将来を真剣に考える必要があるということを痛感し、そこで何度か問題提起をしましたが、人口問題は国連の中でタブー視されており、議論が進みませんでした。

これは今から触れますけれども、「地球との和解の会議」を、「文化の多様性と通底の価値」というシンポジウムの一年後の二〇〇六年の十一月に開きました。これも服部先生のお蔭で日本語で出版されています。その時のオープニングのスピーチで私が強調したことは次のようなことです。日

本の場合は、人口がこれから減ってきますが、世界全体で見れば、私はユネスコの事務局長になった一九九九年十一月には、ちょうど世界の人口が六十億を超えたばかりでした。皆さんご記憶と思いますけれども、一九七二年にローマクラブが「成長の限界」ということで警告しました。私もこのローマクラブの名誉会員になっていますが、人類はこのまま成長を続けると、資源、食糧との関連において、問題を起こす。だから今後の成長政策を見直す必要があるという提言をしました。

当時は大きな反響を呼びましたけれども、その後、第一次オイルショック、第二次オイルショックを見事に乗り切ったものですから、ローマクラブの警告を忘れがちになったのです。ローマクラブの警告を出した一九七二年の時点では、世界の人口が三十六億でした。現在は六十八億か六十九億ですから、ローマクラブが『成長の限界』で警告を発した時よりも人口はほぼ倍になっています。さらに言えば、二十世紀の終わりは、人口は六十億でしたが、二十世紀の初めは十七億でした。ローマクラブの警告を発した一九七二年の人口と比べるとその半分以下だったのです。ですから、二十世紀の百年間において、まさに文明の発達のおかげで死亡率は下がり、生活は物質的に豊かになり、平均寿命が延び、その結果、人口は三・五倍に増えてきたんですね。残念ながら、二十一世紀に入ってもその人口増加の勢いが衰えていません。

国連の中で人口問題を担当している、国連人口基金（ＵＮＦＰＡ）というのがありますが、そこで見通しを定期的に出しています。その見通しによると、私はちょっと低めに見過ぎると思っていますが、それは二〇〇〇年のころから二〇五〇年には世界の人口は九十億を超えると言っていました。今は、九十二億と言っています。しかし、百億は超えないと言っています。私は本当に百億が頭打ちになるんだろうかという疑問を持ち続けています。

持続的成長というのは、りっぱな概念です。これは一九九二年に第一回の地球サミットがリオデジャネイロで開かれた時に打ち出された概念であります。まさにそれはローマクラブの『成長の限界』やその他のいろいろな学者の書いておられることを踏まえて一九八〇年代に国連の音頭で「ブルントラント委員会」というのが設置されました。ブルントラント氏というのはノルウェーの首相経験者ですが、その後ＷＨＯの長になられて私の同僚でした。このブルントラント委員会で、「持続的成長」という概念を出して、そして一九九二年の第一回の地球サミットで、「持続的成長」というのを新しい概念として打ち出しました。環境保護だけでは狭いからということで、もっと広くとらえて、持続的成長ということを打ち出したわけです。その中身を見てみますと、一つは生物の多様性をしっかり守っていきましょうということ、それからもう一つは地球温暖化対策です。具体的には二酸化炭素の排出量を抑えましょうということです。これらのことは、問題をかなり限定的にとらえていると思います。私はそれに加えて、自然との共生をしっかり考えていかなければいけないと思います。「持続的成長」というのは英語で言うとsustainable developmentとなるんですけれども、日本語では「持続的発展」とか「持

続的開発」とか訳しています。私は「持続的成長」という言葉を使っています。持続的発展と言っても、実質的には成長ですから、持続的成長という言葉を引き続き使わせてもらいます。いわゆる「成長」というのに重点を置いているんですね。そこは私が非常に引っ掛かるところであるわけです。

持続的成長とともに自然との共生ということを考えていかなければなりません。このまま人類が地球の資源あるいは自然をどんどん侵食して破壊して行くということは、まさにこれは持続的な成長に反するわけです。自然との共生というのをもっとしっかり概念として打ち出さなければいけません。ですから、「持続的成長」という概念の「成長」の中身をしっかり見直す必要があると思っています。もう一つは「自然との共生」という概念です。この二つの概念をしっかり打ち出していくということが必要だと思います。

文明の物質的な面と知的・精神的な面

私は今日この「人類と文明」というテーマで、あえて「文明」という言葉を使っているんですけれども、「文明」という言葉は英語の civilization に当たるわけで、どうしても出発点の西洋文明というのが根底にあります。西洋文明というのはやはり産業革命以降の物質的な側面に重点を置いた文明になっています。ですから、例えば、トインビーの有名な『歴史の研究』、*A Study of History*、彼は A Study（いくつかあるうちの一つの研究）と言っていて、The Study（唯一の研究）とは言っていませんけれども、非常にいいことを言っています。文明というのは、その時々のチャレンジ（挑戦）にしっかり応えることで文明が発生し、それが逆に応えられないときには、文明は滅びると言っています。これは非常に正しいと思います。ただ文明の定義は西洋的すぎます。今日は深入りしませんけれども、物質的な文明に非常に偏り、物質的な文明ということに重点を置いてきた文明の概念です。もっと知的な面、精神的な面、そういうものを考える必要があると、私はかねてから思っています。

例えば、私が中学生、高校生の時に習った世界の歴史の本では、人類に最初の文明は四大文明であると書かれていました。メソポタミア、エジプト、インダス、中国という文明です。これらの文明のあった地域には、立派な形で遺跡が残っています。その典型的なのはエジプトです。ヒエラルキーができ、ピラミッド型の社会ができて、その上に非常に強権的な国王が誕生して、その下で分権化が進みました。そして、そういう強権的な国王の下で社会ができて初めて物質的な文明ができたのです。そして四大文明と言われるんですね。私どもの日本について言えば、縄文文化と言いますが、学者の方も決して縄文文明と言わないわけですね。これは縄文文化、今から一万二千年か一万一千年前でしょうけれども、その後、ずうっと一万年の間、日本人の我々の祖先は非常に平穏に、そして今で言う、まさに地方分権的な地域社会を作って、ヒエラルキーのある体制を作らなかった。だから生活も採集生活、漁労生活を中心にして、縄文時代の終わりのころ、弥生時代にかけて、米の栽培が入って来ますけれども、非常に平穏な社会を作りました。

しかしながら縄文土器の推移を見ると、最初は単純ですが、だんだんかなり高度な縄文土器を作っていました。私は縄文文化というのがエジプト文明、メソポタミア文明に決して劣らないと思っています。残念なのは、縄文時代は文字がないことです。エジプトなどは、神聖文字が残っていて、概ね解読されています。それなりに、言語の一つの形態である文字が残っているんですね。どういう生活をしていたか、どういうものの考え方をしていたかということが分かるわけですけれども、縄文時代は文字がないわけです。今、一生懸命いろいろな縄文時代の遺跡の発掘が行われて、いろんなことが調べられていると思いますけれども、残念ながら文字がないですから、人々はどういう考え方で行動していたか、どういう生活をしていたか、分からないわけです。生活状況は多少推測できるにしても、どういう考えでいたのかというのは分からないわけですね。ですから、残念ながら縄文文明じゃなくて縄文文化と呼ばれているんですけれども、個人的には、かねてからいろいろ考えれば考えるほど、縄文文化とエジプト文明との間に非常に大きな差があるような考え方には疑問を持っています。

ですから、文明ということにおいて、かなり物質的なものが大きな要素を占めています。しかし人類の歴史を考えると、やはり物質的な文明だけではなくて、もう一つ知的な発展ぶり、あるいは精神的な発展ぶりを本当はしっかり検証していく必要があります。しかしながら、そのためには言語がなければできません。もちろん、遺跡から若干推測できますけれども、しっかりとした形で検証ができないということが非常に大きな隘路、障害になっていると思います。

文明間の対話、異文化間の対話

先ほど服部先生からお話しがあった「文明間の対話」という点について申し上げます。これは二〇〇一年が国連総会の決議で文明間の対話の年として認定されました。その実施機関にユネスコが決められました。これは私にとっては大変光栄なことでした。私がユネスコの事務局長になる前にそれは決まっておりました。ですから、先ほど申し上げたように、私はユネスコの事務局長に一九九九年十一月に就任しましたけれども、その後の大きな責任の一つはこの二〇〇一年の「文明間の対話」をしっかりと進めるということでした。ですから私は、コフィー・アナン事務総長と相談して、これを推進していたのがイランのハタミ大統領であったので、彼と組んでやろうということになりました。二〇〇〇年九月にアナン事務総長の了承を得て、国連総会の部屋を借りて、世界各国から十名余りの国王、大統領をお招きして打ち上げをやったのを非常によく覚えています。残念ながら二〇〇一年の九月に（ちょうど一年後になりますけれども）、九・一一事件が起き、しかもそれは文明間の衝突とも言われるものでした。私はそういう分析に賛成しませんが。いろんな行事をやって、私なりにいろいろ将来の方向づけをしたし、もちろんユネスコだけではなく、いろんな所でいろんな形でやってくれたのですが、大げさに言うとみんなふいになってしまって、残念に思ったのを覚えています。

ハンチントン教授によれば、文明は世界

で八つあって、日本は一つの文明圏として選ばれています。そのことは非常に光栄です。ただ、文明間の対話の時に、いろいろな文化の間の対話、異文化間の対話というのを必ず付け加えるようにして、ユネスコではやりました。つまり文明間の対話だけですと、先ほど言いましたように、物質的な文明を中心にした一つのグループを国々が作って、そのグループの間の対話のような印象を与えます。そうじゃなくて、文化というふうに、もうちょっと事例を細かく分けるというやり方です。一国の中でもいろんな文化が存在するという国がたくさんあるわけです。そういう国の中においても、異文化の間の対話が必要です。これは中国もしかり、インドもしかり、アメリカもしかり、大国になればなるほど、それが必要になります。

世界に文明は幾つあるかという定義は、学者によっていろいろ変わりますけれども、大きなわけ方だけでは十分でないんですね。やっぱりもっときめの細かい、文化という次元でしっかりとらえて、その異なる文化の間の対話を同時に進める。ですからユネスコとしては文明間の対話の二〇〇一年の間に、文明間の対話ということでいろいろやると同時に、私は異文化間の対話というのも同時に掲げて推進をいたしました。これは、まさにユネスコの知的な活動の一環であったわけですね。

世界の人口問題

先ほどの話しに戻りますと、事務総長の下で、国連の諸機関の長が年2回集まって議論する場で私が繰り返し提起したのは、地球の今後について考えようということです。持続的成長は重要だけれども、それだけでは狭いので、自然との共生ということをもっと考えなければいけない。その時に大きな壁は世界の人口問題だということを提起しましたけれども、非常に反対が強くて、入り口で議論が進まなくなりました。

というのは人口問題というのは世界的にはタブーです。世界人口会議というのがエジプトで一九九四年に開かれました。その時に宣言が採択されて、要するに片や人口増加を見直そうという意見があって、それに対して人口問題に首を突っ込むのはタブーであるというカトリックの国を中心とした国々があって、その妥協として、よく分からない文章ができました。Chief Executive Boardは国連の一番最高の議論をする所ですが、一九九四年の会議が現段階での限界で、あれ以上、人口問題というのは掘り下げられない。だから、人口問題というのはこれ以上進まないんだという話でした。私は非常にそれが残念でした。

水、エネルギー資源、原発

それから、「持続的成長」についても、やっぱり成長（development）に重点が置かれています。もちろん持続的ということでそれに対して大きな制約がかかっていますけれども、その中身をもっとしっかり見ていく必要があるなと思います。京都議定書（プロトコール）では、地球温暖化を防ぐために、二〇一二年までの二酸化炭素の排出量の削減目標を決めました。これは重要だけれども、実はそれだけではないんです。例えば、水の問題があります。

これはユネスコが力を入れていたので、私は水については自信を持って発言できま

す。さっき申し上げたように、二十世紀、世界の人口は三・五倍になりました。それから一人当たりの水の消費量は倍になっているんですね。二十世紀の間に世界の水の総消費量は七倍になっているんですね。それはもろちん生活水準の上昇を反映しています。確かに二十世紀の初めでもサハラ以南のアフリカの砂漠近辺に住んでいる方は水が本当に足りませんでした。我々日本人は水で苦労していません。どちらかと言うと、水は無制限に供給されるというイメージがあったかと思います。最近の電力事情その他で、今できるだけ水を節約しようということになっていますけれども、昔に比べると、水というものに対して日本人の感覚は、残念ながら鈍くなっています。もちろん、ヨーロッパはもっとひどいです。例えば私の子どものころはお風呂なんていうのは、一家族で、五、六人いても同じお風呂にみんな入っていたわけです。ご承知のように、ヨーロッパでは、お風呂に入るたびにみんなお湯を換えていますけれども、日本もだんだんそういうところが増えているような印象を持っています。やはり水についても二十一世紀に、もし人口が最初の六十億が二〇五〇年に仮に九十億になったとしても、人口が五割増えた時、水の供給はとても五割は増えないんです。それから、地球的に見ると水の供給がアンバランスになっており、又消費もアンバランスです。途上国で一人当たりの水の消費量が増えれば、先進国で減らさない限り世界の一人当たりの水の消費量も増えていくわけですね。ですから水の問題一つ取っても、人類はもっと真剣に考えなければいけません。

それからエネルギー資源です。これは今回の福島の原子力発電所の事故にも関係ありますけれども、やはり石油、天然ガスは有限ですから、その後を考えなければなりません。それでまさに原子力、その次が核融合を考えているわけです。核融合の場合には時間がかかるから、まずエネルギー節約をする。しかしながらやはり原子力に頼って行こうというわけです。私は基本的な方向は、正しかったし、今でも正しいと思っております。原子力の安全性は一層高める必要がありますが、今回の事故を見てもそのように思っております。

しかしながら、先ほど来申し上げているように、人間は他の動物を征服したと同じように、自然に対しても非常に強い力をもってきています。日本にはいろいろ地震もあり津波もあり、いろいろ自然災害がありますから、まだそれでも自然の力というものをいろんな形で感じています。今回まさにそれを非常に残念な形で経験しました。しかし、ヨーロッパに住んでいますと、特にヨーロッパの豊かな平野に住んでいると大きな自然災害を経験することがありません。皆さんパリに地震があると言うと、びっくりされます。私もパリに十六年住んでいますが、十六年で一回地震を経験しましたけれども、大した揺れじゃないんです。というのはアルプスというのは結局二つのプレートがぶつかってできた所ですから、アルプスの周辺というのは地震があるわけです。アルプスの南のイタリアというのは地震国に見られがちですけれども、フランスもアルプスの近辺で、多少は地震がありますが、非常に小さな地震です。フランスにいるとそういう自然災害と言うと、唯

一、水害ですね。洪水です。それも大した災害ではないです。ヨーロッパ的な感覚で言うと、この自然というものを人間はしっかりコントロールできるという考えというものがだんだん出てきたのではないでしょうか。グローバルに見れば、私はそれは再検討しなければいけないと考えます。自然というのはもっと力があって、やっぱり人間はできないところがあるんですね。そこはしっかり事前に検証をして、やっぱり人間の力の限界というものをしっかりわきまえて、この自然と共生していくという態度を取らなければいけないと、かねてから思っておりました。

今度の福島原発の事故について、「文明災」[1]というのを私は言いすぎだと思います。というのは、被害を受けられた方には申し訳ないですけれども、一つ一つ見てみると、人災という面が強いのです。

津波・地震とユネスコ

ユネスコは実は自然科学を担当していましたから、津波とか地震はユネスコの担当になります。これは国連システムの中での話ですけれども、空の方は、ＷＭＯという国連気象機関が担当して、ユネスコは海と地上を担当しています。海に関してはユネスコの傘下に政府間海洋委員会というのがあり、私どもはＩＯＣ（Intergovernmental Oceanographic Commission）と呼んでいます。これは海に関しては全体のことを議論する場になっています。海に関しては世界的な権威がある機関です。あまり日本では残念ながら知られていません。

一九六〇年にチリでＭ九・五という、今まで文書に残っている人間の歴史の上で一番大きな地震が起こっています。その結果、津波が発生して、地球の反対側の、まさに東北の今回の三陸沖で百六十人ぐらいの方が亡くなったと言われています。それはチリで起きた地震によって、津波が日本に来るというふうに思ってなかったということなんです。従って日本に全然備えがありませんでした。さらに、そういう津波の動き方に対して国際的にそれをしっかり監視する体制がなかったということで、今申し上げたＩＯＣが中心になって、一九六五年に太平洋津波警報システムというものを作って、ハワイに連絡センターを置きました。ハワイで情報を集めて、それをメンバー国に連絡するという体制ができました。

ところが皆さん覚えておられると思いますが、二〇〇〇年の十二月にスマトラ沖地震が起きました。これはＭ九・一ですから、今回の地震よりもさらに〇・一上の地震です。この時は今回と同じで、地震よりも津波で、スマトラはじめインドネシアで十万以上の方が亡くなりました。タイのプーケットという外国人が好んで過ごす有名な海岸には、津波が届くまでに二時間以上かかったのですが、そこでも何千人もの人たちが亡くなりました。一番ひどいのは、今海賊で話題のソマリアです。ソマリアでもまさに先ほどお話しした、チリ地震で亡くなったのと同じぐらい百何十人の方が亡くなっているんですね。全体で二十五万人の方が亡くなっています。それは津波警報システムというのがなかったからです。私はすぐ音頭を取って、ＩＯＣの下で、一年以内にインド洋の津波警報システムを作りますと言いました。二〇〇五年の一月に国連防災会議というのが神戸でありまして、

正式にはそこで発表しましたが、その前にも新聞などには発表しておりました。これは約束どおりで一年半で作りました。それからカリブ海と地中海でも作りました。ですからそのインド洋のまさにスマトラ地震の例は、今度の大震災と津波に非常に当てはまるんですね。三陸はまだ高地がありますが、スマトラの場合は平地が多いので、二十分で逃げるというのは非常に大変だったと思います。それにしても警戒心がないから、十万以上の方がインドネシアで亡くなりました。それから、プーケットは先ほど申し上げましたように、津波が押し寄せるのに二時間以上かかっているんですけれども、逃げなかったんですね。私がデンマーク、ノルウェーをその後訪問した時にびっくりしたんですけれども、プーケットでデンマーク人二、三千人、ノルウェー人が二、三千人死んでいます。それでデンマークやノルウェーで、戦後、自然災害で、最大の被害を出したのはインド洋の津波なんですね。二、三千人も死ぬということは彼らにとっては考えられないことで、それはまさにプーケットで亡くなっているんですね。それはまさに一つは警報システム、もう一つはみんなの心構えです。プーケットでも地震があったのを感じているんですけれども、それが津波という形でプーケットを襲うということは誰も予告しないし、彼らも知らなかった。これはですからね、そういうシステムを作ると同時に、人々の教育が必要であるということです。ですから地震があったら、大きな地震があれば、もちろん警報を直ぐに出す。そして逃げる。高台に向かって、高台がなければ内陸に向かって、車があれば車がいいですが、何しろ走り出す。それが一番重要です。当時、日本の気象庁がＩＯＣのメンバーですから、気象庁の幹部といろいろ話す機会がありました。日本の場合は、地震が起こっても三分以内に警報を出して、五分以内に避難し、みんな日ごろから訓練を受けていますという話を私は真に受けていました。けれども、今度の津波を見てみると、本当に被害を受けて亡くなられた方は申し訳ないんですけれども、逃げられた方は助かっていますので、そうでない方が残念ながら大勢おられたということです。そういう意味では、千年に一回にしろ、二千年に一回にしろ、そういう自然というものの脅威、自然というものの力というものをもっとしっかり事前に予測して、それに常日ごろから備えていくということが本当に必要であるということを、インドネシアで非常に感じました。今から六年半前になりますけれども、今回また改めて感じました。

福島原発の事故

それから原発については、先ほど申し上げたように、石油、天然ガスはいずれ枯渇するので、核融合が実際に活用されるまで、原子力を活用するというのは当然の選択だと私は思っています。今度のことで、もちろん地元の人はお気の毒ですが、脱原発というのは世界的に広まっていて、私は非常に残念に思います。

というのは、今度の場合も、よく見れば福島第二原発よりももっと北の女川原発にしろ、何とか津波の攻撃から生きながらえて、もちろん部分的な問題は生じていますけれども、福島第二原発のような問題が生じていないわけです。やはり第一原発が四

十年前に建てられたということを別にしても、津波の想定が五メートルだったわけですね。貞観地震が八六九年にあって、津波は十五メートルで、かつ内陸に四～五キロまで入って行ったというのは、地質の研究で分かったというのが二〇〇四年でした。私に言わせれば、貞観地震もさることながら、インドネシアの地震がまさにそうなんですね。九・一で、貞観地震と同じぐらいのものですから、何でインドネシアの沖で起こったことは日本で起きないと思われたのか。あるいはそういう議論が、そもそも行われてなかったのだろうと思います。後で知ったことですけれども、五メートルの津波の想定というのは解せないし、原発の下に発電機を置いたこととか、電力補給ラインが切れたときにすぐに代替する電源を用意していないとか人災の面が相当あるのではないかと私は思っています。今回の事故は人類特に日本人に対する警告として「文明災」として非常に大きくとらえることはできないことはないかもしれませんが、「文明災」と言うと、何かもう人間として手が打ちようがなかったというような印象を与えるとすれば、（そういう意図ではないと思いますけれども）私はそれは行き過ぎじゃないかと思います。やはり今度の事故というのは、相当人災の面があるので、その人災の要素というものをしっかり検証して、こういうことが今後起こらないようにすることが大切です。恐らく東北ですぐそういうことが再び起こると思いませんけれども、東海地震、南海地震等々、まさにそういうことが起こるといわれているわけですから、今回のことをしっかり反省材料として、そういう人災的な要素が今回どういう形であったのか、しっかり検証して、しっかり対応する措置を取ってほしい。それからもっと広く言えば、先ほど来申し上げたように、やはり持続的成長というものをしっかり土台に据えながらも、「成長」というものをもう少ししっかり考えて、それと併せて、自然との共生という、自然と共に生きていくということをしっかり考えなければいけない。

自然との共生と天然災害への備え

ちょっとこれもさかのぼります。二〇〇五年に愛知万博に国連館を出させていただきました。その時のテーマはまさに自然との共生だったんです。日本の国際的なスローガンの一つは、日本人というのは自然とうまく共生していますというものでした。私も実はそう思っていましたし、いまだに私も、世界的な規模で言えば、そう言っていいと思っています。自然としっかり共生していく。共生というのは共に生きて行くということです。自然を支配できるところは支配できるし、支配できないところは、それを無理して支配できるようにするのではなくて、自然の力というものを受け入れて、それに対する対応策というのをしっかり立てて、そして自然と共生していく、共に生きていくということにおいては、日本は他の国よりは進んでいると思います。しかし、残念ながら日本には天然災害がある国ですから、相対的に見て、他の国より進んでいるからといっていいのですが、まだ十分ではありません。だからこそ今回のような大被害、多くの人的な犠牲者を出しているわけですから、ぜひこの機会にしっかり国民レベルで議論してもらいたいと思い

ます。もちろん短期的にとりあえず対処をどうするのか、いろいろありますが、これはもうぜひしっかりやっていただきたいと思いますけれども、もっと中長期な課題として、そういうことを国民レベルでしっかり議論していただきたいと思います。

人類の八百万年の歴史の中で、氷河期が終わってからの一万二千年ぐらいの歴史というものを、もっと人類は謙虚に見直して、そして今後の人類の在り方というものをしっかり考えてほしいと思います。そういう見地で二〇〇六年の十一月に「地球と人類にはいかなる未来があるのか」というシンポジウムを開催しました。今日、皆様のお手元に配られているのは、それを基に出版された『地球との和解』に掲載されているそのシンポジウムにおける私のオープニングのスピーチの要約したものです。世界から集まってくださった学者の方々の提言も、今読み直しても非常に適切な提言です。私も賛成ではないこともいくつもあるんですけれども、全体の流れとしては賛成です。これはもともとはフランス語を主として用いたシンポジウムだったので、フランス語の「*Signons la paix avec la Terre*」という文を英語で「*Making Peace with the Earth*」と訳したものです。このla Terreというのは地球で、地球と平和を樹立しましょうということなんですね。人類が音頭を取って地球と新しい契約をしなければいけないということまで私は言いました。当時私も現役だったものですから、今よりももうちょっとオブラートに包んでしゃべっているというところがありますけれども、問題提起としては、今から考えても正しかったし、これから皆さんに、あるいは日本の方々に考えていただく材料はこの本にいっぱい入っていると思います。ですから、近藤長官が言われたように、私は今日は皆さんに解答を差し上げることはできません。皆さんにしっかり考えていただく材料を提供するということを主目的にお話させていただきました。ありがとうございました。

コメントと質疑応答

質問者：服部英二
コメンテーター：伊東俊太郎

服部英二　私の敬愛する松浦晃一郎氏ですけれども、最初人類の歴史を言われましたね。この人類が生まれた歴史というのを七百万年というのは妥当な点かと思います。人類の祖先が東アフリカに現れて、六百万年という人もいるし八百万年という人もいます。中間を取って七百万年としております。それから時間がたっていきまして、やっと約二十万年ほど前にホモサピエンスと言われる最初の現人類の形態が現れるわけです。一万か一万千年前に何が起こるかと言うと、これは伊東俊太郎先生の「五大革命説」というものによりますと、農業革命が起こります。農業革命は、同時に世界各所で起こります。一番有名なのがメソポタミアの豊穣の三角、三日月地帯と言われる所です。それが一つの大きな革命でした。その時に、これは石器という言葉を使われたんですね。結局、新石器時代というもの

への移行であります。それからもう一つ大きな革命が今から六千から四千年前に起こりました。それが都市革命です。これは、今日の松浦さんのお話に出てきた文明の誕生です。なぜなら都市革命の都市というのが文明を意味するcivilizationという言葉に入っているからです。civil（シヴィル）というのがそうですね。civitas（キビタス）というギリシア語から生まれてきて、都市ということを意味している。だから都市化ということです。その都市化の過程でいろんな構築物ができてくる。人間が自然に対していろんな物を作っていく。つまり城壁も作るけれども、制度も作る、法律を作る、それから階級を作る。王様がいて下に神官がいました。神官というのはトップの場合もありますけれども、多くは王様の下にいました。さらに、軍隊というのがあって、学者がいるというような、こういう組織ができています。そういうのを文明というのかどうか、という問題があります。というのは、文明（civilization）の中に都市化という意味が入っているから、そこが一つの問題なんです。松浦先生が今日指摘されたのは、都市化しなかった文化にも都市化した文明に匹敵するものがある、ということだと思います。

松浦先生の触れられなかったことに、「伊東五大革命説」の中の、もう一つの革命「精神革命」があります。これは紀元前六百年と言ってもいいでしょうか。これはいろいろ考え方がありますけれども、ヤスパースなんかは、そのぐらいを考えています。しかし伊東先生は最近のテーゼでは、やはりイエス・キリストを入れるということで、紀元〇年ぐらい、イエスが亡くなったのは紀元後三十三ないし三十五年ぐらいですから、そこまでを入れておられます。こういう精神革命というのが世界のいろいろな所に、例えばインドに釈迦が現れる、中国に孔子が現れる。ちょうど時を同じくしてギリシアにソクラテスが現れる。こういう同時発生的な動きがあって、人類文明というものは進化してきたということです。

最後に十七世紀にヨーロッパに起こったのが科学革命というものでありまして、それが産業革命というものを惹起します。そこから飛躍的に文明の様相が変わったわけですね。大自然を統御する、統御する、征服するという態度が非常に鮮明になっていく。今日松浦先生が言われた物質文明というのが飛躍的に進歩するのがその時からであります。

ではなぜそれまで同時多発的に各所に起こっていた革命が、科学革命の時だけ一地域に起こったのか。十八世紀から十九世紀に、ヨーロッパという一地域が急速に列強という形になりまして、世界を制覇するという現象が起こったわけですね。それが近代文明という性格を形づくる。松浦先生が言われた言葉で言えば、文明と言うとまず西洋文明を考える形を取ってきたわけです。

これが現在、急速に地球を破壊している。こういう認識が最近生まれてきました。まず生物多様性の問題から申し上げます。この『地球との和解』という本に非常に詳しく書いてあるんですが、生物多様性というものは我々にとって根本的な問題です。何と現在毎日、百種類の生物が地上から姿を消しています。これがなぜ愕然とす

る数字かと言いますと、私がユネスコをちょうど辞めるころには五十種類と言われていたのが、それが既に、百種類とされているのです。毎日です。それが地上から姿を消しています。こういう事態が起こっています。

それから、恐らく十年から十五年の間に水の絶対的な不足が起こります。それに松浦講師も言われたように、人口問題という巨大な問題があるわけです。人口問題ですが、日本のように少子化云々が問題だと言っている国、これは世界から見ると例外的であります。全体で見ますと、この二十世紀の間に、つまり、きんさん、ぎんさんが生きてきた、百年ちょっとの間に世界の人口は四倍になりました。四倍になるだけならいいけれども、いわゆる生活の向上ということがありますから、エネルギーの消費、水の消費というものが、それの倍になり、八倍ということになります。こういう問題があるんですね。

これをグラフでかきますと、最後の所、いわゆる科学革命が起こってからの三百年というものは、人類が生まれてから六百万年であることを考えてみると、本当は二万分の一の時間帯に、いいですか、人間自身が現れてこの地上に生きてきた二万分の一の時間帯のうちに地球を破壊しようとしているということになりますね。これをカレンダーに置き換えますと、この三百年という問題の時間は、人類の歴史を一年とすると、十二月の三十一日、午後十一時五十七分になるのです。もう本当にそういうところに来ているわけですよ。こういう最後の所でパッと地球を殺そうとしている現実があるのです。

そこで地球システム・倫理学会というのは、まさしく、そういう事態をどうするかということをみんなで考えるために、伊東先生が中心になって作られた学会であります。人類が絶えず地球を壊してきたのではなくて、近代という新しい時代が始まってから急速に地球は壊されていきました。人口は化石燃料の発見と同時に爆発的に増加するんですね。人口爆発というのが起こります。これは過去三〇〇年ぐらいのことですから、非常に短時間に半月のカーブを描くようになったのです。

伊東俊太郎　今日いいお話を伺って、いい機会を持てた。この道徳科学研究センターとしても大変記念すべき日になったのではないかと思っております。それでお話の中身について、私のコメントを申し上げます。歴史的なことはまず置いて、現在どういうふうになって、どうすべきか、ということだけを話してみます。それから、松浦先生は問題を投げかけるので、皆さん考えてください、というふうにおっしゃいましたね。だから私の考えを述べます。

服部先生がよくまとめてくださいましたが、まず第一番目に、現代は非常に大きな転換期だということです。このことは、私はずいぶん前から主張していました。つまり五つの革命を紹介してくださったけれども、今はそのつぎの六番目の人類史的な大きな転換期だということを言い続けていました。それを「環境革命」と呼んで、自然と人間との関係の再調整ということをここでしなければ、我々の未来はないんだということで、十七世紀に始まった「科学革命」、そしてそれを受け継いで、「産業革命」が十八世紀に起こります。それが世界

的に膨張して、今日に至っているわけです。

その単なる延長線上に二十一世紀はあり得ないと私は思うんです。つまりそれで行けば地球は破滅し、駄目になってしまう。そういう大転換期に我々は生きているんだということをまず言いたい。そういう意味では人類史の中で、非常に重大な時代に我々は生きている。ある意味でこれは大変なことですよね。三・一一を考えても、大変な時代ですよ。だけどその大変な時代は、このままじゃ駄目ですよというふうに、我々に転換を要求していると、私には考えられる。自然は我々に声を上げているのかもしれない。

つまり自然と人間との関係は、「科学革命」以降は、ずうっと自然征服だったんですね。自然を科学という力でねじ伏せるということなんですよ。ねじ伏せて、そこからいろんなものを取り出して、人間の利得を増長させる。これはもう本当にある意味で大きく実現しました。その意味で成功しました。

しかし今、自然との関係の再調整が求められています。今日の松浦先生のお話の中で何回か、自然との共生との問題が取り上げられました。今、そのことを考えなければいけません。ヨーロッパに発生して、我々もついついそれに従って、自然支配、自然征服が人間の目的なんだとか、我々の生存の条件なんだとかいう考え方。こんなことを根本的に改めて、自然と共に生きていくという新しい関係に入らなければいけない。それは「環境革命」の一番大きな点です。

第二番目です。そうすると「環境革命」においては、そういう意味で自然観を変えていかなければいけないのと同時に、科学技術というのも変わらなければいけない。科学技術は、自然を分析して、その力を利用しているわけです。私がこれもずいぶん前に言っていたことですが、それを今度の三・一一でもう一度思い出すわけです。自然を破壊する科学技術と、自然を保存しようとする科学技術があるということです。これをはっきり区別しなければいけない。

自然を押さえつけて、これを無理やりに奴隷化する。このような科学技術は、暴力的な科学技術と私は呼びたい。今度のことでまたそれを思い出します。だから自然観を変え、科学技術の在り方を変えなければいけない。

それで三番目に言いたいことは、文明の形を変えなければいけないということです。これは一番大きい。「自然観の変換」、「科学技術の変換」も、この「文明の変換」、文明の形を変えることの中に含まれる。ブルントラントさんが言い出したsustainable developmentについて触れられましたが、その言葉に何べんか松浦さんも頭をかしげられた。何か、もうちょっと修正したいようなことを言われたけれども、休憩の時間にお聞きしてみたら、あそこでは実は「sustainableな生活様式」というふうに言いたかったんだ、ということでした。ライフ（生活様式）なんだということです。これは正しい。私はそれの方がずうっといいと思います。

今では経済界では、生きがいとか、いろいろ言い始めているけど、今までは「成長」という概念しかなかったんですよ。よりたくさんのものをより効率的に使う。だ

から物質でもエネルギーでも、できるだけたくさん効率的に使う。そうすると服部先生がおっしゃった、それは exponential curve でね、産業革命以来、急速にこういう指数関数的増大を続けていって、この先に人類の先があるとは思えない。そうなったら地球は三つも四つもなければならないが、地球は有限です。そこで、こんなことをやっていると、我々は共倒れで、人類総崩れになる。

だから今の転換期はどういうことかと言ったら、「文明の転換」です。それはどうすることなのかと言うと、「成長」に変わる、「定常」ということが重要になる。ステイショナリーな社会、脱成長の社会です。カーブが変わって平衡状態になる。我々は今その変曲点にいるんだと、そういうことなんですね。これはまだあまり自覚されていない。というのも経済界は成長、成長と今でも言っているじゃないですか。民主党でも言っているんです。だけどね、私は成長は全くいけないということは言いませんよ。それは生きて行くためにはある程度あってもいいと思うけど、今みたいな異常な成長が続けられるはずがないのです。脱成長、成長後の世界というものを考えなきゃいけない。それが非常に大きな転換点になるんですね。だから成長社会から定常社会へ転換するんだ。そうすると今までマイナスに思われているものがかえってプラスになる。高成長がかえって恥ずかしい。というのも高成長し続けて、それだけ地球を崩しているんだから。中国はすごいな、何か日本を超えて、アメリカも超え、素晴らしい、と言う。だけどちょっと待ってください。地球のためを考えたら、やっぱり成長はほどほどにしなければいけないのです。日本は下がっているとしたら、下がっていても、そういうステイショナリーな社会の中で我々の幸せを求めることができるならばいいんじゃないでしょうか。

development という言葉に対して、épanouissement という言葉をセルジュ・ラトゥーシュ[2]が言っていますけど、成長がなくても我々の充実した生活はありますよ。大きな生きる喜びは、そういう人たちの人生の中にもありますよということを盛んに彼は言っている。いろんな例をあげてね。それを間違えて、また、「発展」と訳しているけれども、本当はその社会発展というものがどういう形のものか問題にしなければいけない。

服部　「充実」という訳がいいんではないでしょうか。

伊東　「充実」はいいなあ。「花が開くこと」ですね。生の充実・開花というのはあるんですよ。物質が多ければ多いほど生が充実するんじゃないんだ。だから決して悲観的になることはない。我々はその中で生きがい持って生きて行くということはできるのです。物質は多ければ多いほど幸せだ、なんていうのは、これはうそです。ある程度はそうですが。かつてはそうでした。だけど今ではもうそうでない。この三つの点だけを言って終わりたいと思います。

服部　伊東先生の言われた幸せとか生きがいとかいうことに関しては、GNPの指標を出すのとは別に、幸福度を出している統計があるんですよね。インターネットで“Happy Planet Index”という言葉で検索すると出てきますよね。そうすると、アメ

リカなんかは一二〇位ぐらいにしか行かないんですね。もう終わりの方です。日本もトップの方に入っていない。確か二十位か、中ごろです。Happy Planetというのはセルジュ・ラトゥーシュも使っていたものです。ブータンの王様が言ったGross National Happiness（国民総幸福量）ですね。それで行きますと、日本ははるかアメリカの先にあるけれども、それでもトップの方じゃないんでね。バヌアツかブータンがトップの方に行きます。人間は本当は幸福になりたいのじゃないか。成長と幸福を取り違えるなということなんですが、松浦先生このあたりで何かちょっとコメントをいただけますか。

松浦　お二人のお話を伺って、三点申し上げます。第一点は、今、伊東先生が言われた、我々が人類史上大きな転換期に立っているということについてです。まさにわたくしは、こういう言葉は使いませんでしたけれども、さらに言えば、ちょっと大げさに言えば、人類史八百万年の中で、正確には、最初生まれたのは、いわゆる猿人ですから、我々の直接の祖先は二十万年前にエチオピアで生まれています。ですからホモサピエンスに限定して言えば、まさに二十万年の人類史の上で非常に大きな転換期を迎えた。伊東先生が言われたように人類史上いろいろな転換期がありました。最近では産業革命という、非常に大きな転換期がありました。この産業革命以降、人類は本当に物質文明から裨益して、今まさに情報革命ということです。しかしこういうことを考え直さなければいけない。私がまさに言わんとしたことで、伊東先生が非常に上手に言ってくださいましたので、大賛成です。

先に非常に重要なことを言う時間がありませんでしたが、「持続的成長」なり「持続的発展」の概念に代えて、「持続的な生活様式」とか「持続的な生活パターン」という言葉を使うべきと私は考えています。これは伊東先生からご披露していただいて感謝します。やはり発展ではなくて、生活様式ということで考えていく必要がある。これが第一点です。第二点は、先ほど触れませんでしたけれども、二酸化炭素の排出量の削減に当たって、一番抵抗しているのは中国、インド等のいわゆる途上国です。私なりに解釈すれば、彼らの議論は、「先進国はまさに産業革命以降の物質文明を堪能し、その過程で自然を破壊してきたじゃないですか。現在ある状態は先進国の責任なんです。今度我々がまさに先進国のレベルに達しようとしている時に、先進国が破壊してきたことに対して共同責任を取れと我々に言うのは何ですか」ということです。中国はまだ一人当たりのＧＮＰで言えば日本の十分の一ですし、伊東先生の言われた科学技術で言えば、日本の何分の一のレベルです。さらに言えば、アフリカ、特にサハラ以南はもっとひどい。世界の人口は今、七十億弱でアフリカは十億です。国連がこの七十億から九十億になると予想していますが、私は九十億でとても終わると思っていないんですけれども、アフリカ全体では十億から二十億になる。アフリカはむしろ中国のさらに後ろから追っかけてきているわけですから、彼らから見れば今の中国が言っている議論どころじゃないんですね。「我々の成長を先進国は邪魔しないでくれ。あなた方は産業革命以降、もう二

五〇年以上も物質文明を堪能してきて、我々は今からなのに、それを阻害しないでほしい。」というわけです。これに対する回答を先進国は持ってないんです。ですから二酸化炭素の排出量でも、日本の言っていることは正しいけれども、みんなが参加して初めて二十五パーセント削減しますということですが、これもちょっと今、原発問題であやしくなりました。一体途上国をどうやって説得するのか。今の途上国の議論に対して、私は有効な反論を持っていません。

それから三番目に申し上げたいのは、今度は日本の次元です。私は先ほど世界人として発言させてもらいましたけれども、今度日本人として見ると、やはり少子化、人口減少というのは、日本の国の在り方として本当にこれはいいのかどうか。今のような失われた二十年、これはさらにいえば、名目ＧＮＰはほぼ横ばいですから、しかしそう言いながら、私は十六年ぶりに日本に帰ってきましたけれども、中身はマクロ数字では横ばいだけれども、ＩＴ革命のおかげでいろんな点が便利になっていますね。

さらに言うと、消費がどんどん浪費的になっている。前よりもはるかに浪費的になっている。ですから日本人の生活パターンを変えなきゃいけないけれども、少子化対策、人口減少対策、さらには失われた二十年の回復ということになると、そのカギは成長ということになってきてしまうんですね。この成長は持続的な成長であるべきです。ですから世界人類全体の動きの中で、今後日本の在り方をどう考えるか。これは私も世界人として発言すると、先ほど来申し上げたような議論になります。しかし、今度一日本人として、日本に帰ってきて一年余りですけれども、日本の在り方を考えると、私も非常に複雑な気持ちになります。この三点だけ申し上げます。これはあくまでも問題提起だけです。

服部　非常に難しく、簡単に答えが出せる問題じゃないことはよくお分かりになると思います。今「成長」という問題が出てきたことについて、松浦先生も今日触れられた一九九二年のリオデジャネイロでの地球サミットに関連して申し上げます。一九九二年と言いますと、私まだユネスコにいたんです。それでよく内部の動きを知っていますけれども、UN Conference on Environment（環境に関する国際連合会議）すなわちUNCEということで準備は始まったんです。ずうっと準備が進んで行っていた時に、中国とインドを筆頭にした途上国が、今松浦先生が言われた議論を展開したんです。悪いのは先進国だという議論です。「我々が今度は成長しようとするとお前たちは抑える。だから大気を汚しても煙突が欲しい」という議論です。それがなかなか反論できないのですね。今まで資源を浪費してきた、全部搾取してきたと言ってもいい先進国の側からは反論できなくて、それでUNCEで終わる会議に、Ｄが入っちゃったんですよ。Development のＤが。だから「環境と成長に関する国連会議」になったんです。だからUNCEDとなっていますが、我々事務局が構想していたころはＤがなかったんです。それが中国などの強硬な反対で、CEで終わるべきものにDevelopmentが入ったという経過があるんです。そこでその時に今度は先進国側が妥協案として出して来たアイデアが

Sustainable Development です。妥協案であるから、このSustainable Developmentのための Education ということを文科省が一生懸命やろうとしていますが、なかなかピンと来ない、と言われています。

私は文科省の人に「環境教育」と言ったらいい、と言ったんですけれども、そうするとDevelopment の意味が入りませんね。だから本当の訳にならないので苦労しているということなんですが。その頃の国際会議での攻防というものは私は身をもって体験しています。そういう点では松浦事務局長も苦労されている。

Development という言葉を中国が使い、途上国のすべてが使っていますが、これに代わる言葉を提示しなければいけないですね。だからそれを way of life（生活様式）というのか……。

伊東　それでもいいですが。私はやはり今言ったように、中国は国全体のＧＮＰが日本を超え、やがてはアメリカを超えるといわれているが、一人当たりのＧＮＰで言えば日本の十分の一だということを指摘されました。そういう人たちに、私はやはり同情します。「その人たちは知らないよ、お前たち、遅く来たんだから」というのではいけない。やっぱり情報革命も含めて、今の科学技術がもたらしたものが行き渡るようにしていかなきゃいけないと思います。

だからと言って、今度は中国の人に、development についてひとりよがりな考察をただ許容すればよいかと言うと、これもまたいけない。「だから俺たちだけは勝手に develop させろ」というのはいけない。どういう答えがあるのだろうか。中国でもない、日本でもない、人類の将来を一緒に考えましょう。先進国であろうが、後進国――これは嫌な言葉で、私はあまり使いたくない――であろうが、とにかく人類のこと、人類全体のことを考えましょうということです。日本だけの利益を考えちゃいけない。外国の人も同胞です。今の地球社会というのはそうじゃないですか。みんな助け合いますよね。日本が困れば、どこからも援助がやって来る。我々も助けなきゃいけない。助けられる時はね。そういう、人類全体のあり方を考えましょう。そうすると、その develop だとか develop でないかという競争第一義的な問題ではなくなる。そういう対立は消えてね、一緒に人類の将来を考える。こういう立場をとりましょう。

服部　もう今、人類が共に生きるか、共に死ぬかというその選択しかないですからね。

伊東　その選択しかないんだからそこへ行こう。そうするとそれについて、私は日本ということを忘れてくださいということを言ったけれども、だけど日本ということをやっぱり自覚してくださいということを最後に言おうと思っているんです。それは逆説のようだが、今、日本が抱えている問題は、まさに地球社会の困難をいろんな面で一手に引き受けている。少子高齢化とかね。環境汚染の問題とか。だから地球的な問題を一番先駆的に受け取っているのは我々なんですよ。だから我々がここで創造性を発揮するならば、これは世界的な貢献になるんですよ。これまで人類史が経験してないこと。我々はその解決案を、我々の中から出さなきゃいけないんですよ。モデルがないんだから。だから今の日本の置か

れている状況もマイナスばっかりにとらない。「悪いことばっかりで、暗い」ではなく、そうじゃない。今、人類の苦難を一挙に引き受けて、それを克服すべく努力しているのは我々なんだという自覚を持ちましょう。だから最後に日本人は利己心を捨ててくれと言ったけれども、日本人としての積極的な貢献というものも同時に考えましょう。

服部　今回の福島原発の事件は大津波が引き起こしたんですけれども、これだけの悲惨な事態が起こりましたが、唯一の慰めと言いますか、日本の文化というものを非常に世界の国が評価してくれたということです。あのような大震災、大津波の壊滅的な被害の中でちゃんと節度を持って、列を作って、ガレキの中でも列を作っていました。他の国ではそういうことは起こらない。他の国では、奪い合いになってしまいます。日本では略奪は起こらない。じっと列を作って順番を待っている。銀行の方は、名前と電話番号を聞いただけでお金を引き出してくれる。そのような国は他にないですよ。日本人の文化には思いやりがありましたね。思いやりがあり、礼節がある。それが非常によく現れた。世界の人々がこれだけ助けの手を差し伸べてくれたことのベースにはそれがあるのじゃないかと思います。だから今日来てくださった近藤誠一文化庁長官の持論は、日本が貢献するのは経済でも軍事でもないのだ、文化力で文化外交をやるんだということなのです。それをやらなければいけない。我々が文化の面でもっと存在感を発揮できるようにということを、近藤さんはいつも言っているんですね。

伊東　そういう我々の生き方でね、そういうものを示しましょうよ。そういう潜在力はあるのですから。

服部　これは最後に松浦先生に聞きたいんですけれども、現在、グローバリゼーションということを言うじゃないですか。しかしながら、その実態は市場原理主義の世界化なんです。それは非常に危険なところに行っていて、これは搾取の形態である。人が人を搾取する形態なんです。それが世界を覆っていて、その波がアメリカやヨーロッパのみならず、日本にも及んでいますけれども、これが世界を結んでいる。我々が人類の連帯を築こうというのに、その裏にそういうグローバリゼーションがあるんですよ。彼らは無国籍です、多国籍のヘッジファンドとか、そういうのをやっているのは。それで単に暴利を貪るための動きですが、自由の名の下に行われているんですね。だからこれを市場原理主義と、マーケットの原理主義と呼んでいるのですけれども、これが世界を滅ぼす。その市場原理主義で行っては世界が滅びるんだということを我々は訴えなければいけないと私は思いますけれども、松浦先生、その点についてご意見を頂ければと思います。

松浦　私がユネスコの事務局長になりました時に、ユネスコは六年ごとに中期計画というのを立てるので、私がなった時には、前の事務局長の中期計画が残っていたものですから、二〇〇一年からの六年の中期計画を作りました。その時のユネスコの一番のスローガンは、今、服部先生の言われたことに関連するんですけれども、グローバライゼーションの結果生じたマイナスの面についてしっかり対応しなければいけな

い。従って、みんなと相談したら、結局「人間の顔をしたグローバライゼーション」という言葉がいいんじゃないかということで、私が進めました二〇〇一年からの六年間のユネスコの中期計画、このプログラムの全体の総称は「人間の顔をしたグローバライゼーション」ということでした。まさに今の市場原理だけではいけないということで、日本国内あるいはそれぞれの国の中では福祉国家の概念が戦後できながらも、どこまで福祉国家の概念を徹底したらいいのか、どこまで市場原理を抑えたらいいのか、いろんな議論があって、国によって違います。ところが、国際的にみると、まさに従来国際交流の障害があったから、国際交流の障害を除くことに重点が置かれました。グローバライゼーションという言葉で言っていいと思いますが、それにもかかわらずいろいろプラスをもたらしていますけれども、私がよく引く例は、初等教育です。初等教育は日本では百パーセント当たり前ですけれども、まだこういう初等教育が五十パーセントにも達していない、つまり二人に一人初等教育を受けていないという国がアフリカのサハラ以南にはかなりあります。また、ミレニアム開発目標の最終年度で、二〇一五年には初等教育を受けてない人をゼロにするという目標を二〇〇〇年に立てたわけですね。確かに初等教育を受けてない人はどんどん減っています。しかし減っているのは中国とかインドで、サハラ以南のアフリカでの減り方は非常に少ない。今、ユネスコの見通しではまだ二〇一五年に七千二百万の人が初等教育を受けないで残っている。こういうのはどう考えてもグローバライゼーション、まさに先ほど来の物質文明と言っていい産業革命以降の物質的な利益に浴せない人たちがいる。それから読み書きできない人がまだ八億から九億残るんですね。そういう状態を直していかなければいけないですね。これに対して、日本は世界にもっと援助しなければいけない。ところが今度の災害対策というのは分かりますけれども、災害対策の財源のために日本のＯＤＡ予算は一九九七年から半分に減っているにも拘らず。それをまた一割減らすというのを閣議で決めました。私はあれは非常に納得できないですね。まだまだ震災についてはしっかりやらなければいけないが、それはもっと他の所から財源を出せばいいので、ＯＤＡ予算を削るというのは私は納得できません。ですから服部先生が言われたように、市場原理だけでは、今、人類が抱えている問題は解決できないんです。問題は、ではそれはどうやって対応するかということをしっかり問題別に議論していかなければいけないのです。教育の次元で言えば、初等教育を完了していない人と、読み書きできない人のことを申し上げました。特に初等教育の七千二百万というのは、本当にゼロにしなければいけない。そういうことに先進国はもっとＯＤＡを出さなければいけないのに、それを日本はどんどん減らしているというのは、私は納得できません。

服部　時間がなくなってきて、非常に残念ですが、会場からどなたかご質問はありませんか。はい、どうぞ。

質問　私はインドの哲学・宗教を研究している者でございますので、そういう立場からの観点も交えながら、少し欲張ったいくつかのコメントとそれから先生方にお話を

伺えればと思います。

今日は物質文明に偏り過ぎたということ、それから先ほど脱成長と、この二つを調和させていくのには、当然、廣池先生の思想とつながると思いますけれども、やはり、古くは、東洋だけではなく、学ぶとか知的に成長するということと、人間として成長する、人格陶冶とかいうことが、調和を図られていたはずです。これがやはり自然科学、まあ自然科学そのものが悪いとは思わないんですけれども、自然科学以降ですね、何かやっぱり精神の成長とのバランスを失い、そこに恐らく市場原理等が加わっていって、競争原理が加わり、知ること、知識を積んで行くことによって豊かになるために人との競争を勝って行くという、こういう人間関係のきずなを断ってでも知的な力を利用していくということになっていきました。ですから、そういう意味では教育と言っても、そのつまりその人が他者に勝つための、チャンスを得るための教育であるならば、その矛盾は増大するだけであろうと思います。精神革命があったわけですけれども、それを伊東先生がおっしゃっているように、科学革命は駆逐してしまおうとしているのかなと思います。そういう中でもって東洋の智あるいはそれ以前の人類が築きあげてきたこの英知というものに立ち返るすべについて考えざるを得ないんですね。

インドの古い宗教は多神教で、多神教の神様というのは人間から供物を捧げてもらわないと力を維持できないという考え方があるんですね。これは古い考え方としてその後成長しなかったのですが、ある意味では、現代は、そのような人間を超えた神、それは自然世界を守ってくれている神様がいて、それは人間が何かをしないとその神様も自然を維持できないという、この考え方はむしろ非常に今日意味を持っているのかなと考えることがあるんですけれども。これは服部先生にお答えいただくことになるかもしれませんけれども、これに関連すると、一神教とこの自然科学的な発想と、どこかつながりがあるのかなという点がちょっと気になっております。

それから松浦先生が人類の三つ、火の使用、それから道具の使用、それから言葉ということですが、それに関連して、最近、チンパンジーをずうっと研究なさっている京大の松沢先生という方が、チンパンジーと人類は、ゲノムでは九十七パーセント以上共通しているとおっしゃっていますが、ただチンパンジーにはなくて人間にあるものという中に、役割分担という考え方は人間にしかない固有なものだということです。この役割分担というのは、インドで言うと「スワダルマ」ということになるんですけれども、つまり人間は一人で生きているわけじゃないので、常に他者との関係の中で自分は何を為すべきかと考える中で、常に人間関係の中にあって、それで自分は何を為したらいいのかなという役割分担が地球社会の一員として問われている時代かなと思います。

もう一点だけ、すみません。物質に対する支配というもの、自然科学、あるいは科学技術が高めているという中でもって、最近は生命科学が発達しています。この生命現象に対してまで人間がいじれる、コントロールできるようになってきたという、このことについてどのように考えたらいいの

か。以上、よろしくお願いいたします。

松浦　今の服部先生のお話にも関連しますが、生命倫理、バイオエシックスのことと、役割分担のこと、この二つに関してお答えします。やっぱり科学の倫理というものはしっかり検証していかなければいけないと私自身も考えています。科学全体の倫理の問題がありますけれども、とりあえずは生命科学では、大げさに言うと、人造人間を作ることも可能になってきています。とりあえず臓器ですけれども、技術的にはできるというところまで来つつあるわけです。その倫理をどう考えるか。これは実は私の前任が始めていたので、私もバイオエシックスに関して非常に力を入れました。ユネスコの条約というと、これは加盟国を拘束するので、加盟国が批准するプロセスを経て批准した国の中で適用されます。もう一つの形態で宣言というのがあります。宣言は原則全員一致で採択して、その代わり、法的な拘束力はなくて、道徳的な拘束力がある。従って生命倫理の場合はまず私は宣言を作ろうとしました。私は、バイオエシックスに関して世界の著名な方たちを集めて二つの宣言を作りました。ところが私の願いはさらに一歩進めて、条約にしたかったんですけれども、三番目の宣言をまとめるのに、まさに宗教的な対立の問題が出てきました。カトリックの国々の人から見ると、神聖なものにユネスコが介入して何か文章を作るということに非常に抵抗があるんですね。先ほどの人口問題と関連するんですけれども、私の前任が一つ宣言を作ったわけですけれども、私が二つ目を作り、三番目の宣言は本当に苦労しました。要するに先ほど申し上げたユネスコの行政機関である執行委員会の五十八カ国でコンセンサスができなくなりました。三つ宣言が採択されて、その次は条約まで行きたいと思ったのです。実はフランスは非常に支持してくれました。ですから、私はシラク大統領と手を握っていたんです。フランスはカトリックというけど、建て前はフランスは「ライク」というか、無宗教の国家体制になっています。ところがカトリックの国々、さらにはイスラムの国々も必ずしも乗ってこなかったのです。そこであきらめました。しかしご指摘のようにこの生命倫理、科学全体の倫理もありますけれども、特に生命科学の倫理というのは、しっかり今後も国際レベルで議論して行かなければいけない。さらに日本国内でもしっかり議論して、本当は国際的なスタンダードがあると、日本国内の議論もしやすいと思うんですけれども、残念ながら、条約はありませんが、宣言を踏まえて国内でも議論をしていただきたいと思います。宣言の先はできなかったということに対して私の残念な気持ちを表明させていただきます。

もう一つの役割分担はですね、私は非常にきめの細かい役割分担というのは、先ほど私が申し上げたこの三つのうちの特に言語の発達によるところが大きいと思います。私は日本に帰る前に、アルタミラと同じ一万七千年前のラスコーという洞窟に行きました。本物の洞窟は一般の人には公開禁止で、「ラスコー2」というその模写で全く同じものが作られています。私はユネスコの事務局長であったし、そこが世界遺産になっているものですから、本物のラスコーをじっくり見ることができました。

そこを見て非常に感じたのは、今のお話

の、やはり役割分担というのは既にあったと思うんですね。私にあんな絵を描けと言っても描けないんですね。恐らくこの中の皆さんでラスコーの絵に匹敵する絵を描ける人というのは非常に少ないんじゃないでしょうか。だから一万七千年前の私どもの祖先がやったことを今の人でできる人は限られていると思います。なぜ当時できたかというと、まさに役割分担があったからですね。日本の縄文時代と同じように、当時、地域社会でそんな大きな国家体制がなかったにもかかわらず、地域社会の中で役割分担をしていた。だから相乗効果で、役割分担があるからさらに発達するということがもちろんあったと思いますけれども、ただ役割分担というのは言語の発達した結果でもあり、また次の発達を促す原因にもなっています。私の見地から言えば、先ほど申し上げた、三つに加えて役割分担というのを入れるのはどうかなという気はいたします。現に、チンパンジーの社会でも、あるいは広く動物社会でもそれなりに役割分担があるわけです。人間の場合はよりきめの細かい役割分担をして行ったということが、この相乗効果を生んだと思います。以上です。

伊東　市場原理主義について言えば、現代、我々は一番大きな問題として何を抱えているかということなんですよ。それは他者の存在を理解するということ。他者を理解する。デカルトはこのことを忘れていた。「われ思うゆえにわれあり」ですから、今服部先生のおっしゃったようにすべてを対象化してしまっているから、どんどん何をやってもいいよということになる。じゃあそういう世界で何が起こるかということを考えてみよう。自然科学ではデカルト的な方向がずーと進んで行きますね。そして機械論的自然観ができてくる。これに応じて社会科学の方では、トーマス・ホッブズが出てくる。ホッブズは「万人の万人に対する闘争」、つまり万人が万人に対して闘っている。万人が万人に対して敵である。そうしたらどうなっちゃうかというと、それを進めたら共倒れになる。そこでその権利をちょっと上の方に上げましょうということで、それを国家とか、神様に委ねていこう。「リヴェイアサン」の統制に従うという点でうまくやって行きましょう。そういうことなんですよ。

だからね、近代社会というのはここから生まれている。万人の万人に対する闘争、ここから生まれているんですね。そこからいろんな国家などを作ったり、それから一神教もそれを保証するものとして背後にはあるわけだ。それで、アダム・スミスは、やはりみんながエゴイズムを勝手にやっていれば市場がうまく調整とってくれるというふうに、『国富論』に書いてあるというのですが、これは真っ赤なうそですね。そんなことはアダム・スミスは言わなかった。その前に彼は『道徳感情論』を書いていて、それを前提としてあれを言っているわけです。『道徳感情論』の第一章は何について述べているか。Sympathy（同情）です。人間はどのようにして他人に対してsympathyを感ずるか。これが道徳の根源だというふうにして、それを推し進めた上で、それを前提としてあの『国富論』を書いているんです。だからsympathyを失うようなやり方で金儲けしたら、やっぱりそれは没落するんですね。決して勝手な市場

の競争だけでうまく行っているということではないんです。

そこで、ホッブズ的立場はやめましょう。だから一神教もこだわらない。どういうことになるか。ホッブズと違った原理を出さなければいけない。「万人の万人に対する助け（サポート）」。この原理をそれに代える。だから倫理の根源というのは、実は神様や何かが与えてくれているんじゃない、と私は思う。だから一神教でいうように、上から降ってきているんじゃないと思う。そうじゃなくて、人間関係の中で助け合う、他人の苦しみを理解する。そして同情をする。困った時は助ける。もちろんこっちも助けてもらうんだが。そういうことが自然に行われて、そこで倫理が成立する。神様はいらないとは言わないけど。カントの倫理学なんかは道徳律が神様から降ってくるんです。カントは「汝の意志が普遍的立法の原理に妥当するように行為せよ」と言いましたが、結局、普遍的立法の原理というのは神様からやってくる。これではない。もっと人間同士の、お互いの付き合いそのものの中から倫理を構築していかなきゃいけないんです。だからキリスト教の世界であろうが、仏教の世界であろうが、儒教の世界であろうがどうでもよい。人間が人間である限り、共通の倫理を私は確立できると思う。

服部　ありがとうございます。伊東先生の素晴らしい気迫に満ちた結論になりました。

司会　松浦先生、伊東先生、服部先生、どうもありがとうございました。

注

（1）「文明災」とは、二〇一一年三月一一日に起こった東日本大震災の復興ビジョンを描くために、内閣総理大臣・菅直人が四月に発足させた復興構想会議（議長・五百旗頭真［いおきべまこと］）の初会合において、特別顧問となった哲学者・梅原猛が指摘したことば。「原発の事故は、近代文明の悪をあぶり出した。これは天災であり、人災であり、『文明災』である」と述べ、「今こそ日本は経済力だけでなく、新しい価値観で世界に範を垂れる国を作るときだ」と結んでいる。

（2）「脱成長」（デクロワサンス）を掲げて経済発展や開発のあり方を問い続ける仏の経済哲学者。著書の邦訳は『経済成長なき社会発展は可能か？』（作品社、二〇一〇年）。

（編集者注：本稿は、平成二十三年四月二十七日に開催したモラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。なお、注は編集者がつけた。）